

太田 健一 (第1期生)

徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 発生発達医学講座機能解剖学分野・助教

私は平成16年3月に鳥取大学医学部保健学科検査技術科学専攻を卒業後に同大学の大学院修士課程に入学しました。その後、平成18年3月に修了し徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部発生発達医学講座機能解剖学分野にリサーチフェローとして就職し、現在は博士号取得を目指しながら助教として働いています。

大学の教員は大きく分けて教育と研究の2つの役割があるのですが、教育では主に系統解剖実習を担当しています。系統解剖とは身体の正常な構造を明らかにするための解剖であり、提供されたご遺体を用いての解剖を行うものです。私の役割は学生に解剖手順と剖出される臓器等を説明し理解の手助けをすることなのですが、これが非常に難しいです。自分が知識をつけることと学生にそれを教えるということの違いに今でも戸惑ってしまい、人に教えることの難しさを感じる毎日です。

研究に関しては、所属している機能解剖学分野という研究室では主に先天異常に関する研究を行っており、特に胎児性アルコール症候群(Fetal Alcohol Syndrome: FAS)に関して調べています。胎児性アルコール症候群とは母親の妊娠中のアルコール摂取が原因となるもので、知能障害を含む中枢神経系の機能異常、発育障害、特異な顔貌が特徴になります。しかしこのような異常が見られない場合でも、情動に関係した障害などが見られることがあり、現在ではアルコールに起因した障害を胎児性アルコール・スペクトラム障害(Fetal Alcohol Spectrum Disorders: FASD)と総称しています。私は、胎生期のアルコール曝露による中枢神経系の異常がどのように不安という情動に関与するのかということ免疫組織化学染色、高速液体クロマトグラフィー(HPLC)を用いた脳内モノアミンの測定や不安様行動試験などの手法を用いて解析しています。一筋縄ではいかないのが研究であり、自分が立てた仮説と全く違う結果が出ることもありますが、自分の理論と研究結果がハマった時はそれまでの苦労などなかったかのように感じるほどの達成感があります。学会発表や論文作成などただ研究だけではなく、自分の研究を形に残すことももちろん大切であり、その度に自分の未熟さを感じていますが同時にやりがいも感じています。自分で理論を立てて実行するというのが研究という仕事の魅力ではないかと思っています。

検査技師とは違った道を選んでいますが、大学で学んだことは研究とは決して無関係ではなく免疫染色、HPLC等などの手法をはじめとする様々な所で役に立っています。少しでも研究に興味を持ってくれる後輩が増えることを願いながら、私自身手本となれるよう頑張っていきたいと思っています。

